



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴女 しらこまひとみ 白駒妃登美

「ゲンジは世界十大古典の筆頭なのよ。西洋の女性が小説を書き始めたのは、せいぜい二、三百年前だけど、紫式部は千年も前にあれほどの物語を書き上げた。素晴らしいわね」旅先のオーストラリアで出会った、日本好きの女性の言葉です。

千年の時を超え、さらに国境を越えて人々を魅了する『源氏物語』。その根底に流れる「もののあはれ」こそが、日本文化の本質と見抜いたのは、江戸時代後期を代表する国学者・本居宣長もとりのりながです。宣長は、中国的な文化や考え方を尊ぶ「漢意」かいいいを脱ぎ去り、日本古来の「大和心」に立ち返ることを説きました。「漢意から大和心へ」——。これは、宣長の思いであり、同時に紫式部の思いでもあったのではないのでしょうか。

✿ 漢意から大和心へ

—— 源氏物語を描いた紫式部 ①

千年の時を超える人間学の最高峰

✿ 「桐壺」を通して描こうとしたもの

源氏物語の第一巻は「桐壺」きりつぼ。この巻の主人公・桐壺は、光源氏の母であり、時の帝の寵愛を一身に受けた女性です。その書き出しはこうです。「いづれの御時おほんときにか、女御・更衣むすめあまたさぶらひたまひける中に、いとやむんことなき際まわにはあらぬが、すぐれてときめきたまふありけり」。

帝の側近くそばに仕える女性には、身分の高い順に「女御」と「更衣」の区別がありました。桐壺は大納言の娘ですから、元々は「女御」となる出自でしたが、後ろ盾だてとなるべき父を亡くし、更衣の中でも末席の立場で入内しゅだいします。

本来、帝の寝所しんじよに侍るはべるのは、女御だけ。更衣にはその資格はなく、当時の社会制度上、

紫式部(生没年未詳) 平安時代中期の女性作家、歌人。藤原宣孝に嫁ぎ、一女を生んだ。

【イメージイラスト】  
アオジマイコ